

鈴鹿からはじまったぼくらの挑戦

岡山県立東岡山工業高等学校
機械科3年課題研究 エネルギー班

この物語は「Honda エコマイレージチャレンジ 2013」第27回鈴鹿大会に挑んだ。10人の若き匠達の挫折と挑戦の記録である。

鈴鹿大会の日はいつも雨になる。今年は台風が接近していた。雨対策も考えておかなければならない。雨が降るとリタイヤが続出する。最初のブレーキテストで不合格となる。

今年、東工からは2台出場だった。過去3年以上完走をしている伝説の「先輩マシン」、そして、先輩の足跡をたどりやっとの思いで完成した「NEWマシン」だった。

毎年、6月中旬に大会がある。短期間でマシンを完成させることはむずかしい。大会を終えた先輩たちが卒業までの時間をかけて完成させたマシンを後輩に託すことになっていた。しかし、先輩マシンにも引退のときが近づいていた。10年ぐらい前にエコカーへの本格的な取り組みが始まってから代々引き継がれたマシンは痛んできていた。そこで、NEWマシンをつくることになった。無謀な計画だった。授業時間は限られている。放課後やるしかなかった。失敗を繰り返した。もう少しのところからすすまない。満足できるものではなかった。仕方がない。時間がない。試運転しよう。前日の夕方のことだった。

めずらしく晴れていた。レースの朝は早い。午前4時起床、6時10分の車検開始までにやっておかなければならないことある。起きてこないものは置いて行った。

マシンを車から降ろす。2台のマシンを詰め込むため、NEWマシンは3分割、先輩マシンも2分割されていた。「組み立てが終わったら、エンジンをかけて暖機しろ」慣れないピットクルーに先生からの激が飛ぶ。「ドライバは鈴鹿のコースを歩いておけ」、「準備ができればブレーキテストに行け」、慌ただし時間過ぎてゆく。いよいよブレーキテスト。先輩マシンは問題なく合格した。NEWマシンは・・・不合格、ピットクルーが不安な表情のまま先生を呼びに行った。「組み立てた後、ブレーキワイヤの調整はしたのか。」、誰も返事がない。先生がブレーキを握ってみた。ワイヤが緩んだ状態だった。「調整し直してもう一度ブレーキテストだ。」2回目のブレーキテスト、ドライバは不安と緊張でいつもの笑顔がない。制動開始の旗が振られた。後輪がロックして黒い跡が路面に残った。合格だった。

続けて車検に向かう。先輩マシンはすでに車検を終えて練習走行の準備に入っていた。NEWマシンの車検に向かう。車検終了時刻が迫っていた。「ステアリングのがたつきが多いですね。」検査員に指摘された。「レース開始のぎりぎりまで待ちますから、補強してきてください。」なんとかレースに出してやりたい気持ちが伝わった。その間にも、先輩マシンは練習走行を重ねていた。何かおかしい。ドライバ判断で練習を中断してピットに戻ってきた。「ガソリンが漏れている？」先生の無線機に連絡が入った。このときはドレンねじの締め忘れかなにかだろうと軽く考えていた。

そのころ NEW マシンは2回目の車検に向かっていた。全チーム車検が終わって検査員全員がレースの話で盛り上がっていた。「すいません。車検お願いします。」10名ぐらいの検査員に囲まれ車検が始まった。検査員は口々に車体の問題点を指摘し始めた。アライメントの調整について、ステアリングの補

強、致命的だったのは車体の剛性不足だった。学校の駐車場でしか走ったことのないこのマシン。「鈴鹿の第1コーナーを時速60から70kmで突っ込んで大丈夫だと思いますか。」と検査員から問われた。みんな自信がなかった。製作時間だけでなく。試運転の時間も足りなかった。沈黙の中、先生が答えた「あきらめます」。NEWマシンのリタイヤが決定した瞬間だった。

あとは先輩マシンに賭けるしかない全員が思っていた。3回目の練習走行に向かう途中、キャブレターの中央部分からガソリンが漏れている。「ビットへ帰れ、キャブレターを交換するぞ」状態は致命的だった。燃費には重要な役割をする部品が破損していた。原因は分からない。「リタイヤしたマシンの部品が使える。アクセル系統から一式移植する」残酷な話だが、残されたマシンに全てを託す。

練習不足のまま、本番に臨んだ。「ストップウォッチは2つ使え、サインボード、無線機を準備しろ……」レースがはじまった。ドライバは淡々と周回を重ねていった。ホームストレートを音もなく下って行くマシン。コースサイドから見ていた先生がつぶやいた「燃料の減りが多すぎる」……「しかたない」。既定の周回を終えゴールした。燃料タンクはほとんど空になっていた。104km/lだった。21位/41チーム、完走チーム中最下位だった。

*****つづく